山武姥山貝塚

―展示図録―

―平成31年調査報告書―

横芝光町教育委員会

はじめに

山武姥山貝塚は、昭和30年代から研究者に注目され、また、千葉県教育委員会によっても重要遺跡の一つとして捉えられ、幾度も調査されてきた。しかし、未だに史跡指定されること無く、保存整備模されず来たが、奇跡的にも遺跡は破壊されること無く、原形を保って来た。しかし、近年、隣接して高規格道路が計画され、その保存が危うくなって来た。昨年も上記道路の関係で墓地移転で遺跡内が一部掘削され、緊急の調査を実施した。この重要な遺跡が今後も保存されるべく、史跡指定、保存整備を計るべく、その一助として本書を出すことにした。

また、昨年の緊急調査の成果も併せて出し、その義務も果たしたい。

目　次

はじめに
目次
例言
1　山武姥山貝塚の環境と周辺遺跡----------1
2　山武姥山貝塚の調査----------3
3　これまでに出土した縄文土器・石器
（1）前期----------5
（2）中期----------5
（3）後期----------6
（4）晩期----------8
4　平成31年の発掘調査
（1）検出した遺構----------16
（2）出土遺物----------17
（3）出土した動物遺体
①　資料と分析方法----------19
②　分析結果
1　貝類----------19
2　脊椎動物----------19
3　貝製品----------20
③　考察----------21
動物遺体関係参考文献----------22
報告書抄録
5　まとめ

例　言

1　本書は、令和２年に町民ギャラリーで展示した「山武姥山貝塚展」の図録、及び平成31年に緊急調査した発掘調査報告書である。

2　平成31年の緊急調査は、遺跡内に墓地移転工事に際し、立会中に検出した遺構の部分が、やむおえず掘削するために実施した。この緊急調査に際しては、町文化財審議会会長西山太郎氏に助力を賜った。厚く御礼申し上げます。

3　本書の執筆編集は横芝光町教育委員会社会文化課障害学習班文化財、町民ギャラリー担当道澤明が当った。また、動物遺体については公益財団法人千葉県教育振興財団調査課小川慶一郎氏に玉稿を賜った。なお動物遺体の同定確認は千葉県立中央博物館黒住耐二氏が行った。ここに記して御礼申し上げます。

4　ここに掲載した資料は、横芝光町教育委員会にて保存しています。

１．山武姥山貝塚の環境と周辺遺跡

山武姥山貝塚は、山武郡横芝光町姥山字台に所在し、下総台地の東端にあって、標高35から41mの台地上に立地する。貝塚は九十九里平野からの深い谷津が東から入り、北、東、南は急峻な崖に囲まれ、西のみ台地本体につながる。貝の散布は、遺跡の北と西側に多く分布し、西側のA貝塚は緩斜面に、北側のB貝塚は谷頭部の少し緩い斜面に、北東側のC貝塚は斜面部に堆積する。ほかにA・B貝塚の間に２箇所、南東側と南側に小規模な貝塚があり、これら七箇所の貝塚が環状に分布し、その規模は南北150m、東西130mを測り、千葉県の太平洋側の貝塚では最大規模を誇る。

山武姥山貝塚の周辺には、縄文時代遺跡が多く分布し、群としてお互いに関係しあって存在したと思われる。貝塚の北には中期集落遺跡の東長山野遺跡があり②、北西には中期末から後期の中台貝塚③、中台A遺跡④、その東には後期の角田・鴻ノ巣貝塚⑤、中期の木戸台貝塚⑥が連なり、さらに北の高谷川沿いには後期の牛熊貝塚⑦、川淵には後期から晩期の高谷川低地遺跡⑧があり、ここでは独木舟や木製品も出土している。姥山貝塚の東には晩期から弥生前期の宮ノ前遺跡があり、どれもが姥山貝塚と有機的な関連を有している。

図１　姥山貝塚と周辺遺跡の位置

写真１　山武姥山貝塚空中写真（東側から）

写真２　山武姥山貝塚近景（南東側から）

2　山武姥山貝塚の発掘調査

山武姥山貝塚は、本県市川市にも姥山貝塚があるところから、これと分別するため頭に山武と付けられているが、本貝塚は古くから知られ、昭和36年から同47年にかけて、計５回にわたり慶応義塾大学によって発掘調査されている。その後、千葉県教育委員会によって県内主要貝塚確認調査の一環で、平成元年に発掘調査された。それらの発掘調査の結果、縄文前期から晩期最終末にいたる土器が出土し、殊に晩期では特徴的な土器が出土し、本貝塚の名を冠した土器型式が設定された。

慶応義塾大学の発掘調査では、晩期の解明のため、Ａ・Ｃ・Ｚ貝塚が集中して実施され、概報が「日本考古学年報」で公表されたのみで詳細は不明で、出土土器については「史学」、「横芝町史」などで取り上げられ、これによって「姥山式」が提唱された。

千葉県教育委員会の発掘調査では貝塚全体の様相を明らかにするため、慶応義塾大学が調査した地点以外で実施された。この調査の成果は、平成２年「横芝町山武姥山貝塚確認調査報告書」として公表され、また、平成12年「千葉県の歴史　資料編　考古１」で概要が解説されて、その様相が明らかになっている。それによると、発掘調査は貝塚の北西部に３箇所に幅２ｍのトレンチを延べ50m、中央部に幅１ｍのトレンチを十字に延べ25m入れた。その結果、西部Ａ貝塚の西側の１トレンチでは晩期の包含層と住居跡が検出され、同期中・後葉の土器が多く出土した。北部Ｂ貝塚の西側の２トレンチでは、前期黒浜式土器や中期から晩期の土器が混在し

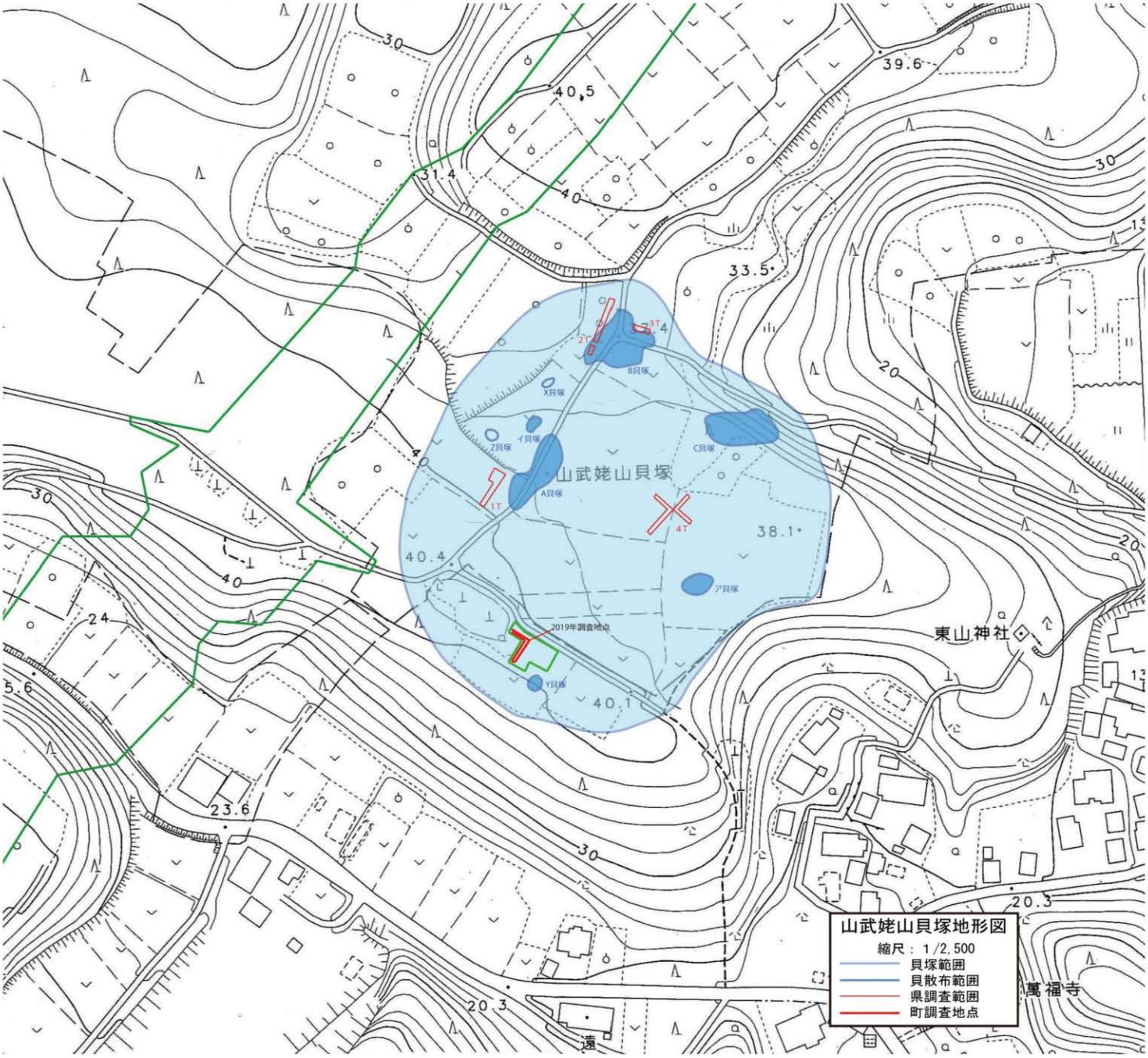


図２　山武姥山貝塚概要図

て出土した。またトレンチの南部では貝層が検出され、貝層の下から晩期前浦式・千網式土器が出土し、B貝塚が同期であろうと推定された。B貝塚の北側に入れた3トレンチからは、土坑が1基検出されたが、出土土器は小さく、時期は不明であったという。中央部に入れた4トレンチは、遺跡中央部の窪地あるいは浅い谷と思われ、粘質の黒褐色土、白色粘土の堆積が見られた。遺構はトレンチ西端で柱穴列が5箇所検出されたのみで、時期は平安時代以降のようである。

以上、平成元年の千葉県教育委員会調査では、慶応義塾大学調査をカバーする意図で調査されたが、縄文晩期の土器のみならず、前期、中期の土器も出土し、その幅の広さが明らかになった。慶応調査ではA貝塚が中期とされたが、県教委調査の1トレンチで出土した中期土器の数量及び土器片の状態は小さく、阿玉台Ⅳ式から加曽利EⅠ式が主であった。直接貝層を発掘していないので断言はできないが、A貝層も晩期と考えていいのではないだろうか。B貝塚は晩期が多いので、当該期とされた。遺跡の北東側斜面に堆積するC貝塚は、慶応大で調査され中期から後期とされるが、後年地元有志等によるこの地点の土砂崩れ時による遺物採集資料を見ると、ほとんどが後期の土器であった事から、中期が含まれるか疑問が残る。

平成31年町教委の発掘調査は遺跡南部の高所で、土坑が2基検出されたうちの1基が発掘された。これの成果は後に記述する。

写真3　A貝塚（北側から）

写真4　C貝塚（北東側斜面下）

写真5　1トレンチB住居跡遺物出土状態

3　これまでに出土した縄文土器・石器

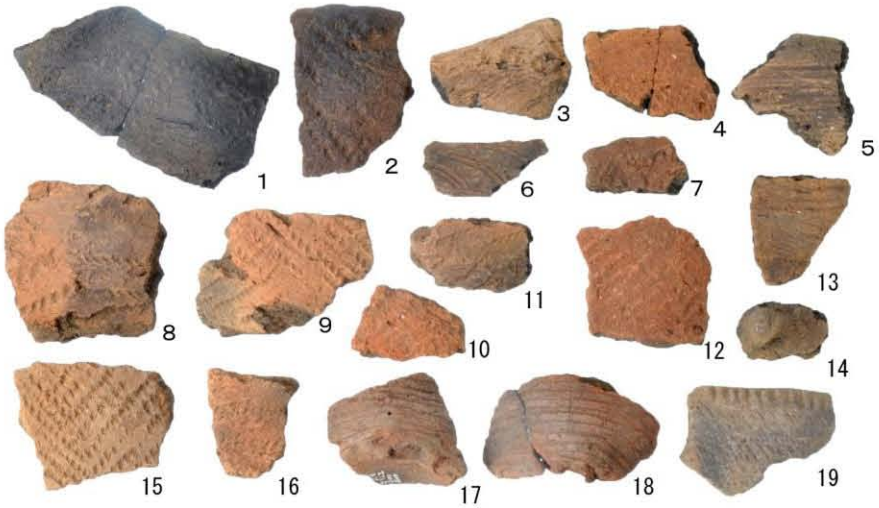
ここでは平成元年千葉県教育委員会調査で出土した遺物と地元採集資料とを、時期を追って紹介する。

（1）前期

前期では黒浜式土器が県教委調査の２T北端から、他時期土器に混じって出土している。また、１Tでは興津式土器が１点(19)出土している。

（2）中期

中期では阿玉台Ⅱ式から加曽利EⅣ式まで、主にA貝塚に近い１Tから出土している。破片は10cm以下が多く、後世の攪乱があったと思われ、量的にも多くはなく、この時期に集落、貝塚を形成していたかは疑問が残る。38・39は有孔鍔付土器である。



前期黒浜・興津式土器

中期阿玉台式土器

加曽利EⅠ～Ⅳ式土器

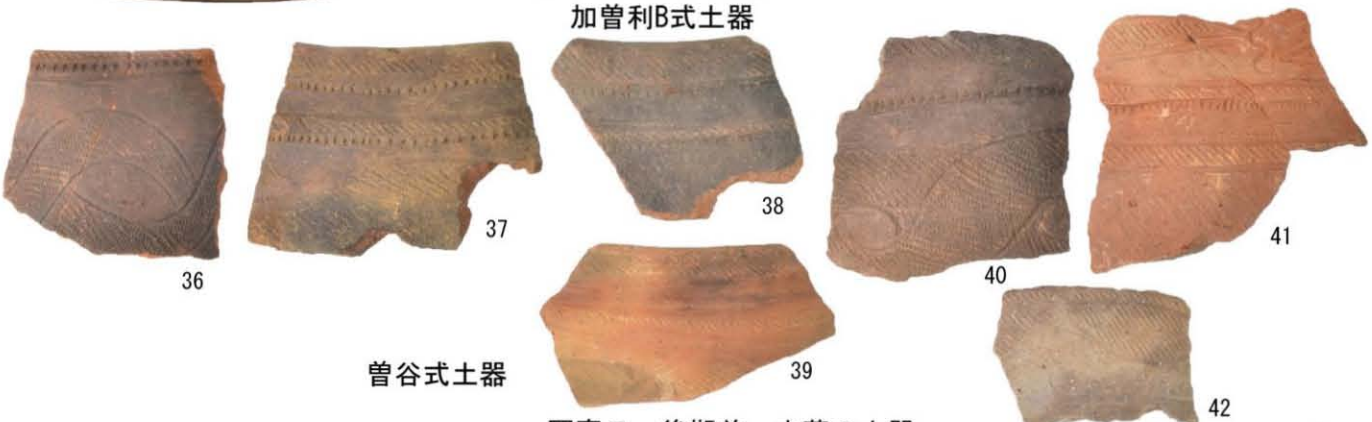
写真６　前・中期の土器

（3）後期

後期は、初頭の称名寺式は１点(3)、それに並行する綱取式(１～２)があり、堀之内１式(４～９)がわずかにあるが、２式は無い。その後、加曽利B式は、２式(10～33)から安行式へと、精製土器、粗製土器が、主にC貝塚から出土している。また、平成31年調査でも、遺構が検出され、加曽利B２式土器が出土していて、この時期、遺跡全体に拡大したと思われる。曽谷式(34～42)としたのは、報告書では安行１式とされる。

綱取・堀之内１式土器

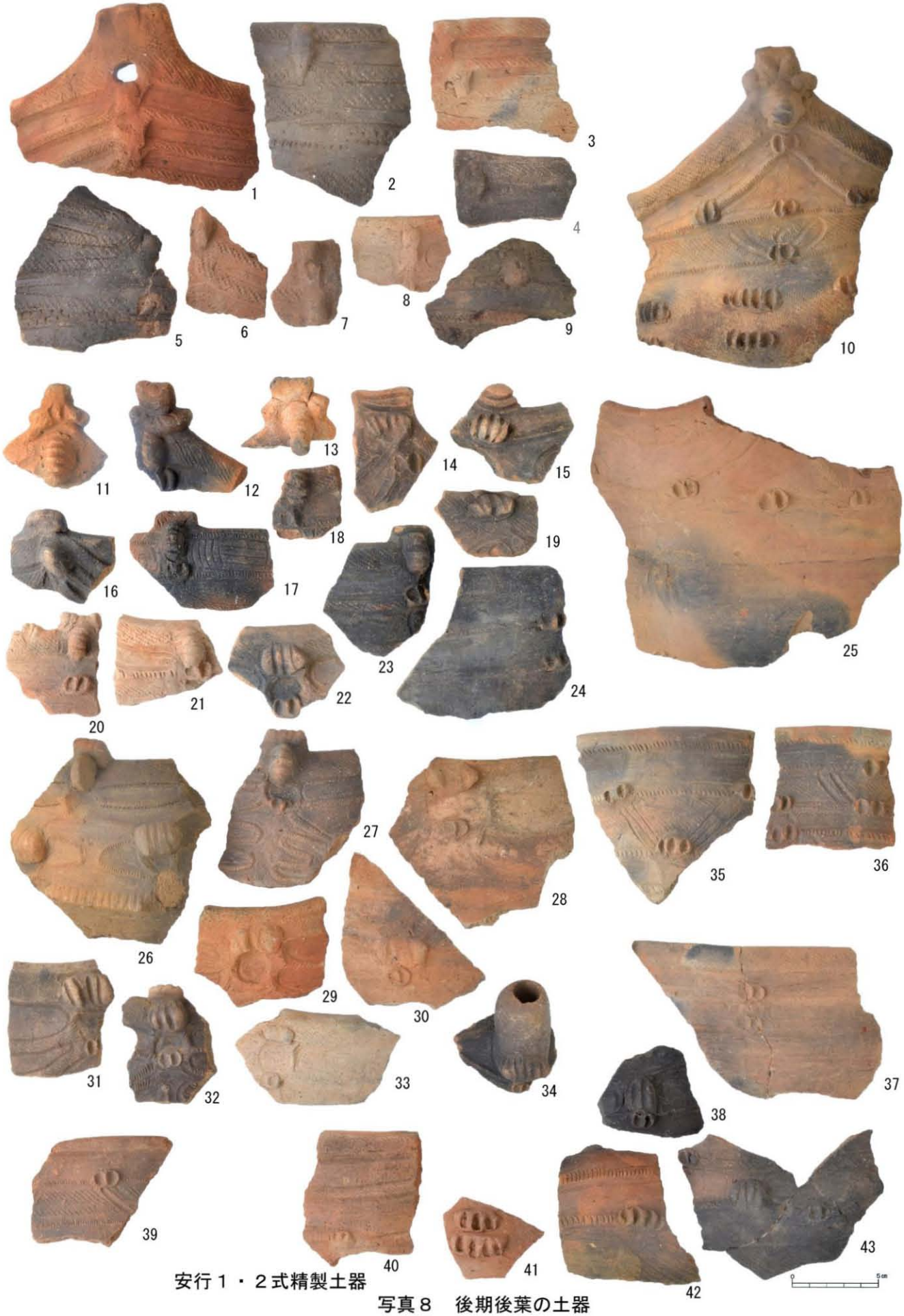
加曽利B式土器



曽谷式土器

写真７　後期前・中葉の土器

後期後葉の安行１・２式になると土器の量は増え、主にB貝塚、C貝塚から出土し、県調査では２トレンチから、また、C貝塚斜面から得られ得ている。



安行１・２式精製土器

写真８　後期後葉の土器

（4）晩期

晩期は、後期末に続いて安行３式が多く出土。主にA貝塚とB貝塚に多く、県調査では１トレンチ、２トレンチから得られ、これに伴って、前浦式、姥山式(姥山Ⅲ式)が入っている。特に１トレンチで検出されたA住居からはまとまってこの時期の土器が出土し、当該期の様相を知る上で、重要な資料となっている。

安行３式精製土器

写真９　晩期前半の土器①

安行３式精製土器と安行１～３式粗製土器

写真10　晩期前半の土器②

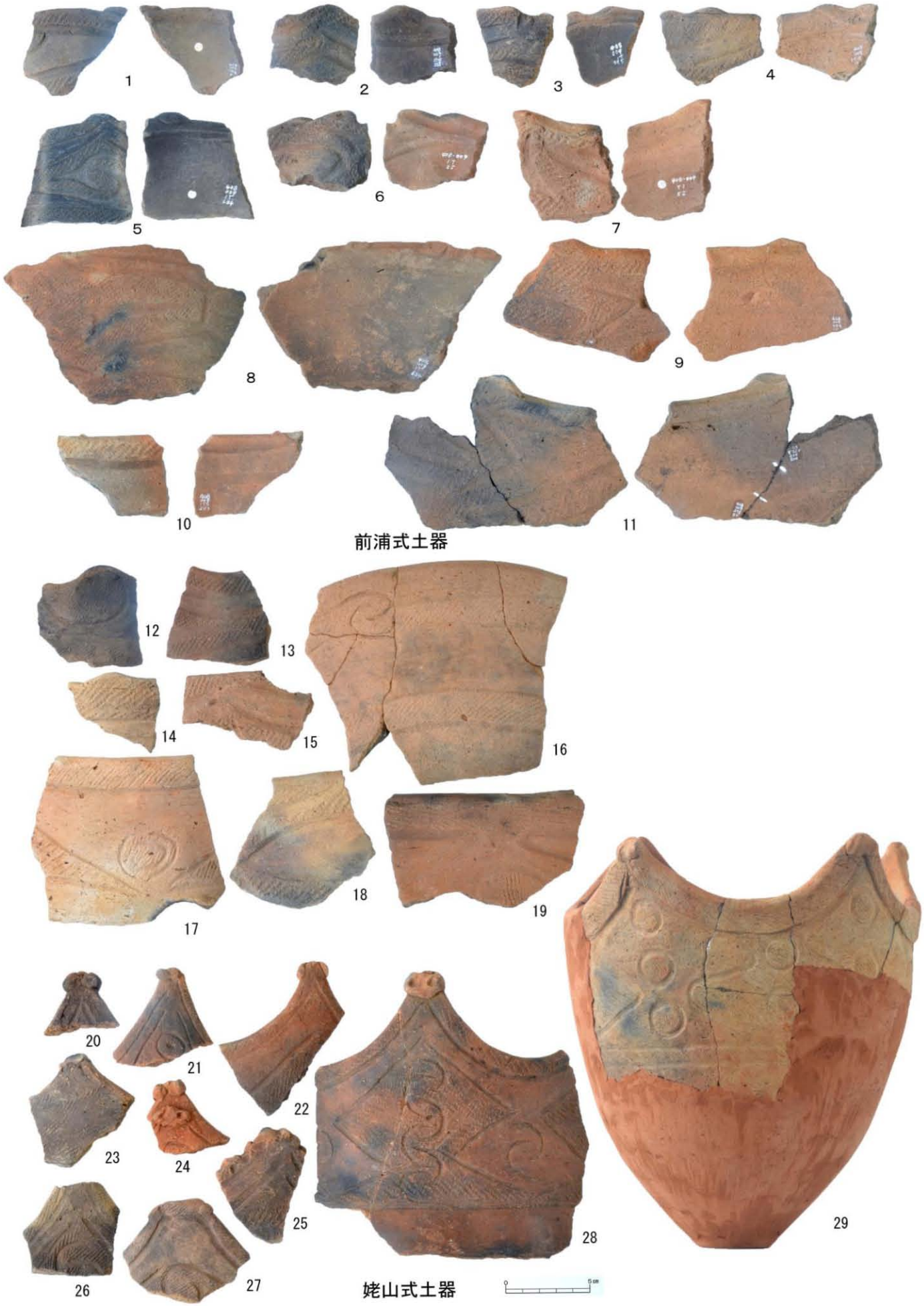
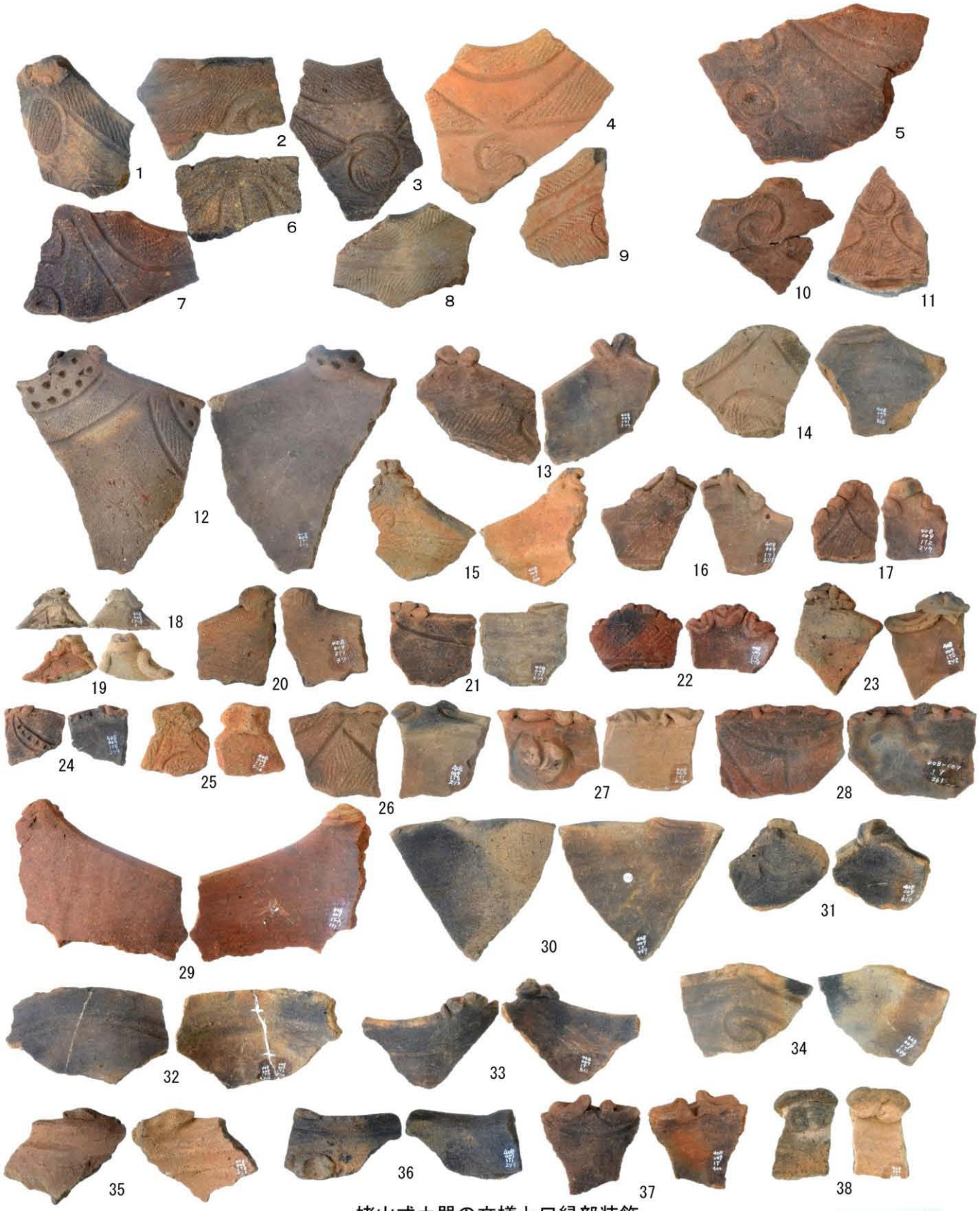


写真11　晩期前半の土器③



姥山式土器の文様と口縁部装飾
写真12　晩期前半の土器④

姥山式土器波状口縁深鉢の文様は、口縁文様帯の下に沈線で円形、三角などの幾何学文様を描いているのを特徴とされる。また、それに関連されると思われる土器には、口縁部に粘土貼付けによる繊細な装飾が見られる。この装飾は土器裏面にも回り、前浦式との関連も考えられる。これもこの時期の土器の特徴かもしれない。

姥山式とされる土器でも、この頁にある土器は、報告では姥山Ⅱ式、Ⅲ式とされたものである。

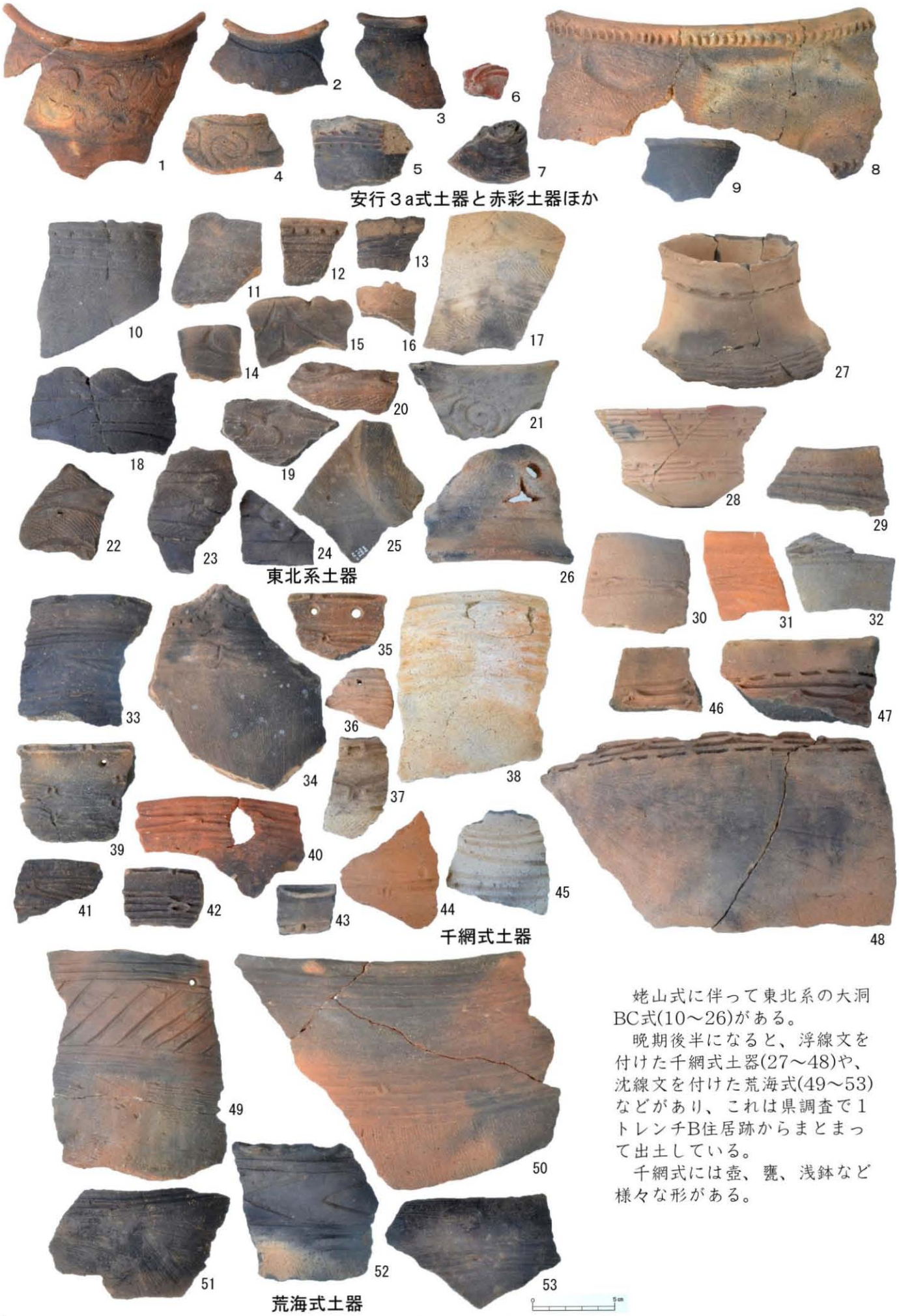
1～6は平縁で枠状文を構成する姥山Ⅱ式で、7～16は同期の粗製土器と考える。

17～33は、刺突文を施した安行3c式か姥山Ⅲ式とされる土器である。

34～55は細線文を施した姥山Ⅲ式で、いずれも器厚は薄く小型の精製土器である。

姥山式土器

写真13　晩期前半の土器⑤



姥山式に伴って東北系の大洞BC式(10～26)がある。

晩期後半になると、浮線文を付けた千網式土器(27～48)や、沈線文を付けた荒海式(49～53)などがあり、これは県調査で1トレンチB住居跡からまとまって出土している。

千網式には壺、甕、浅鉢など様々な形がある。

写真14　晩期後半の土器①

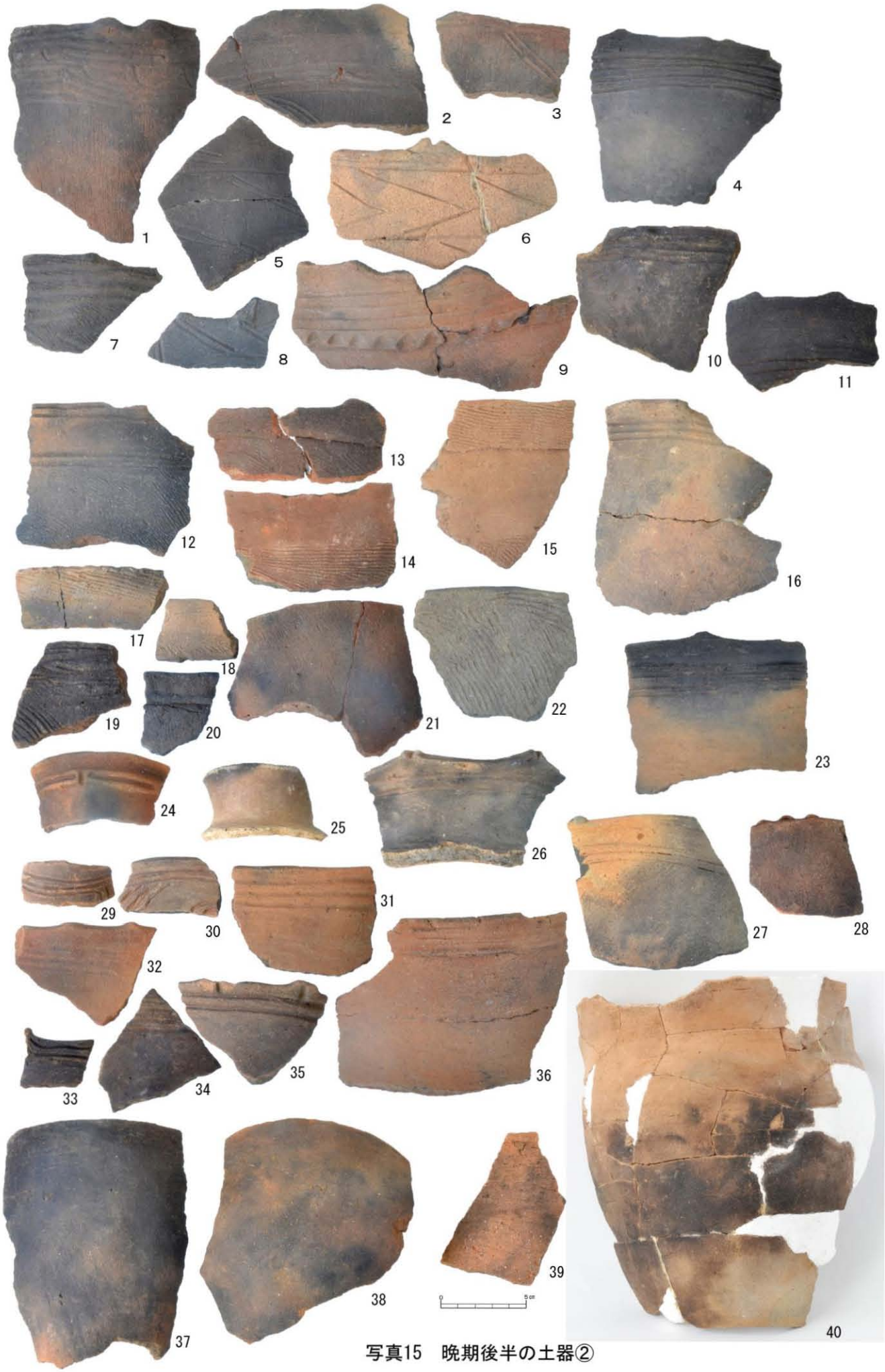


写真15　晩期後半の土器②

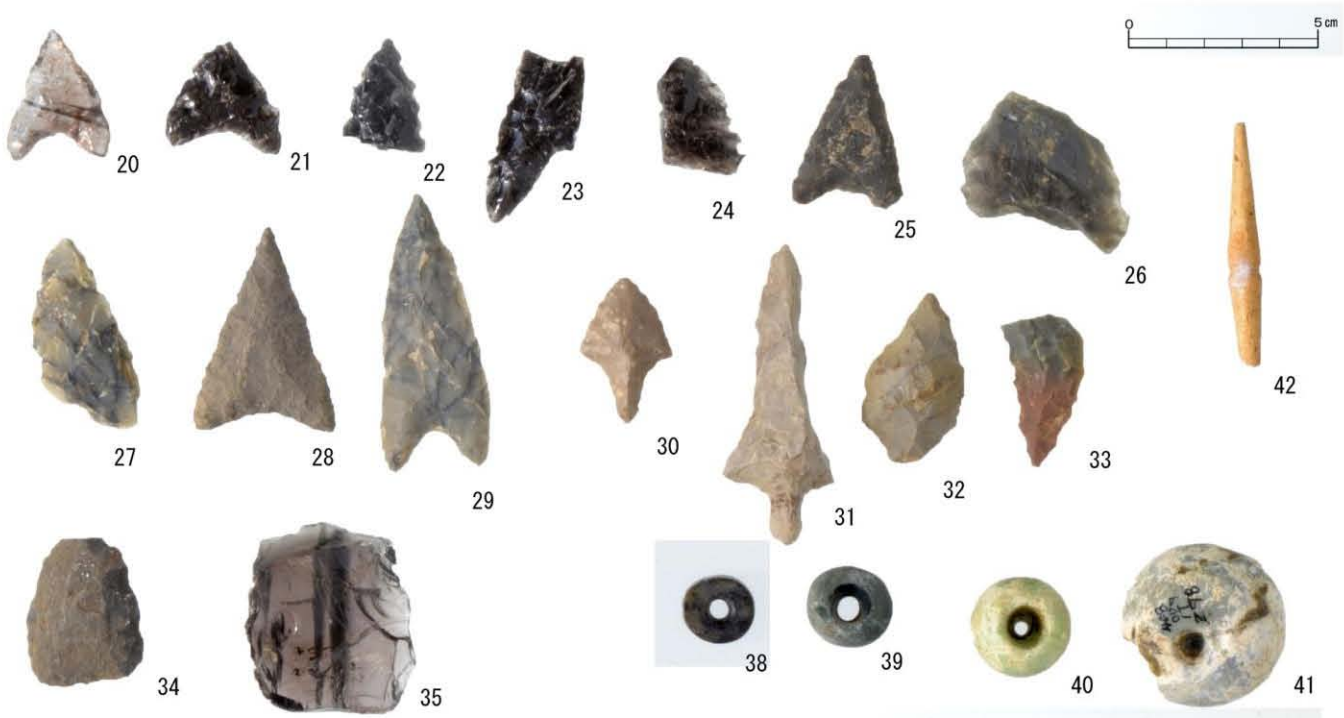
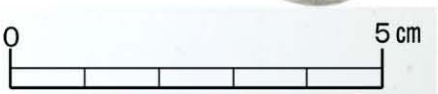


写真16　その他の遺物



その他の遺物

土器以外の遺物では、土器片を再利用した円板(９～19)、土偶片(３～６)、スタンプ状土製品(１)、耳飾(２)、匙状土製品(７)などの土製品があり、石器では石鏃(20)、石斧(36)、石剣(37)、玉(38～41)がある。また、骨角器のヤス(42)がある。これらは１トレンチから出土していて、多くは晩期の所産と思われる。

4　平成31年の調査

（1）検出した遺構

平成31年１月の調査では、２基の土坑が検出されたが、その内の１基が工事の掘削で破壊が免れなかったため、緊急で発掘した。発掘した土坑は、径１m程の平面円形で、深さが確認面から1.5mを測り、覆土中には貝層及び貝混じり層が堆積し、その中に土器等の人工遺物のほかに、獣骨・魚骨なども混じっていた。土器は大きく３層に分けて取り上げたが、いずれもか曾利B２式で、これによってこの土坑が当該期の所属と考えられる。貝種の同定、分析については、公益財団法人千葉県教育振興財団職員小川慶一郎氏に依頼し、その成果をこの後に掲載したので、それを参照されたい。

写真17　調査地と１号土坑

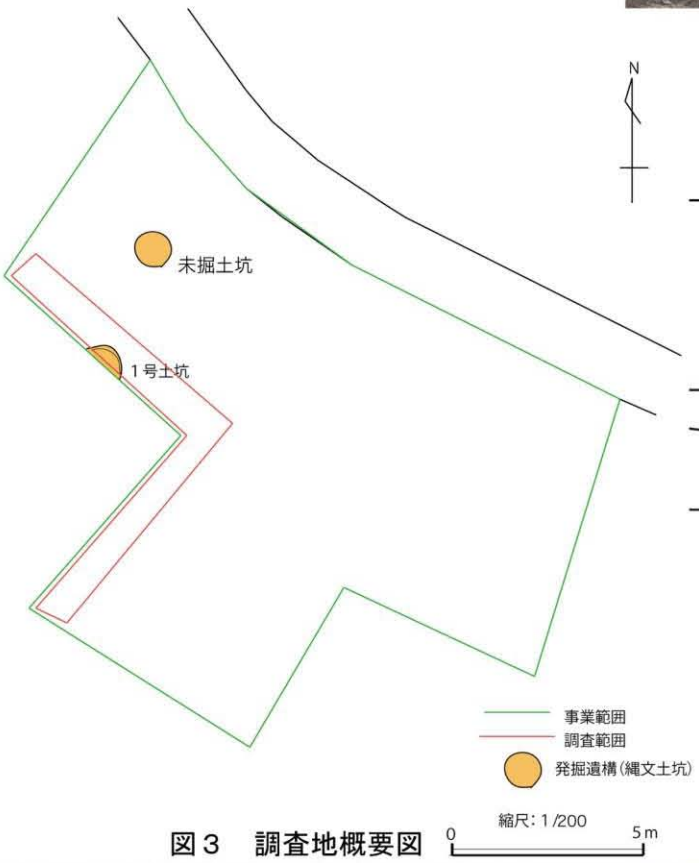


図３　調査地概要図

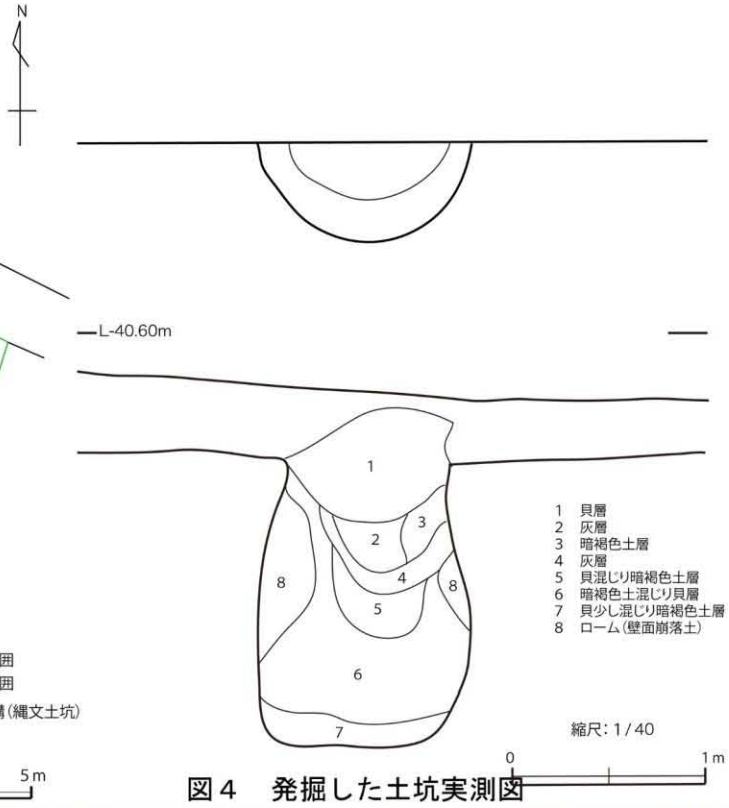
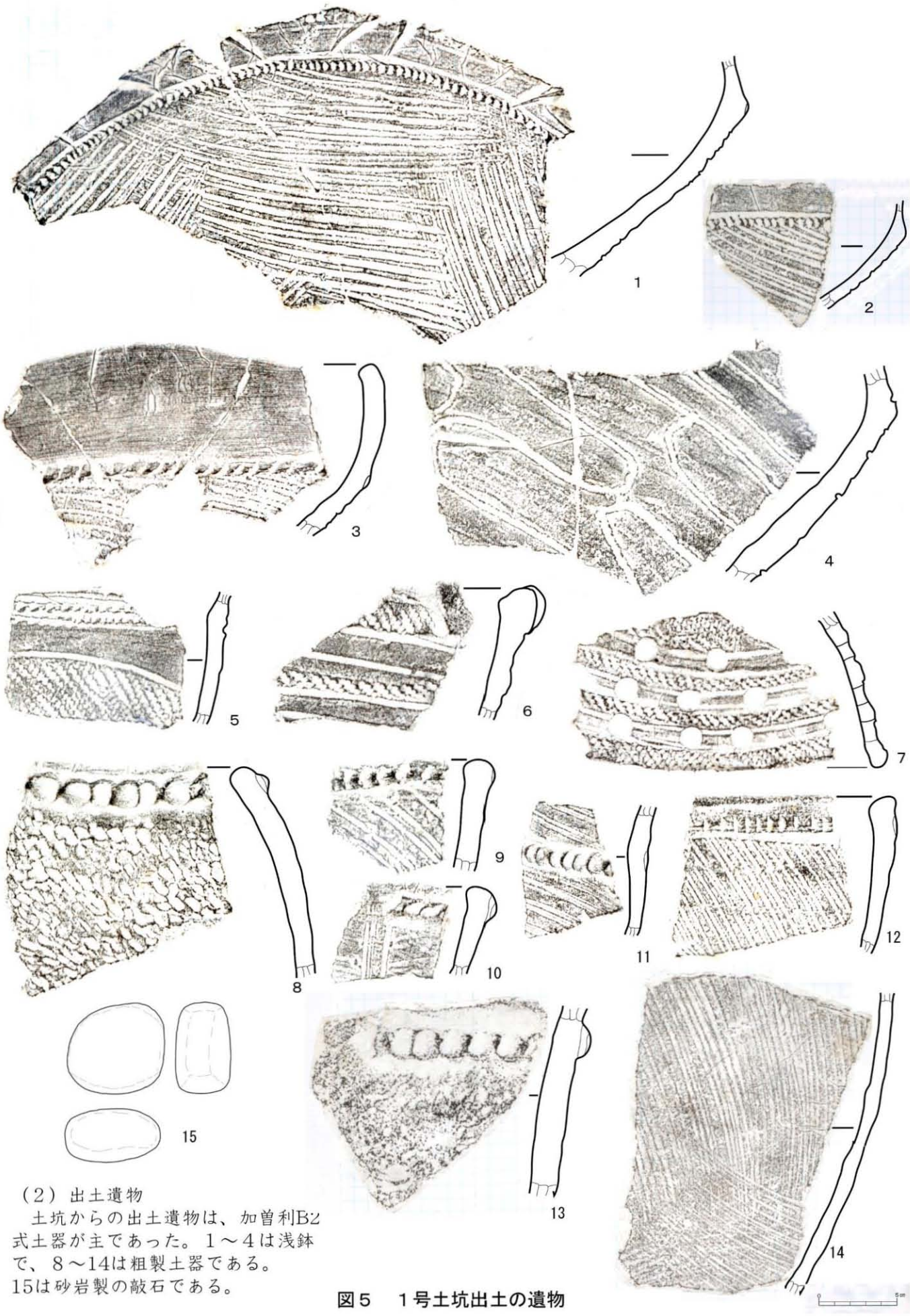


図４　発掘した土坑実測図

写真18　発掘した土坑

写真19　発掘した土坑土層断面



（2）出土遺物

土坑からの出土遺物は、加曽利B2式土器が主であった。1～4は浅鉢で、8～14は粗製土器である。15は砂岩製の敲石である。

図5　1号土坑出土の遺物

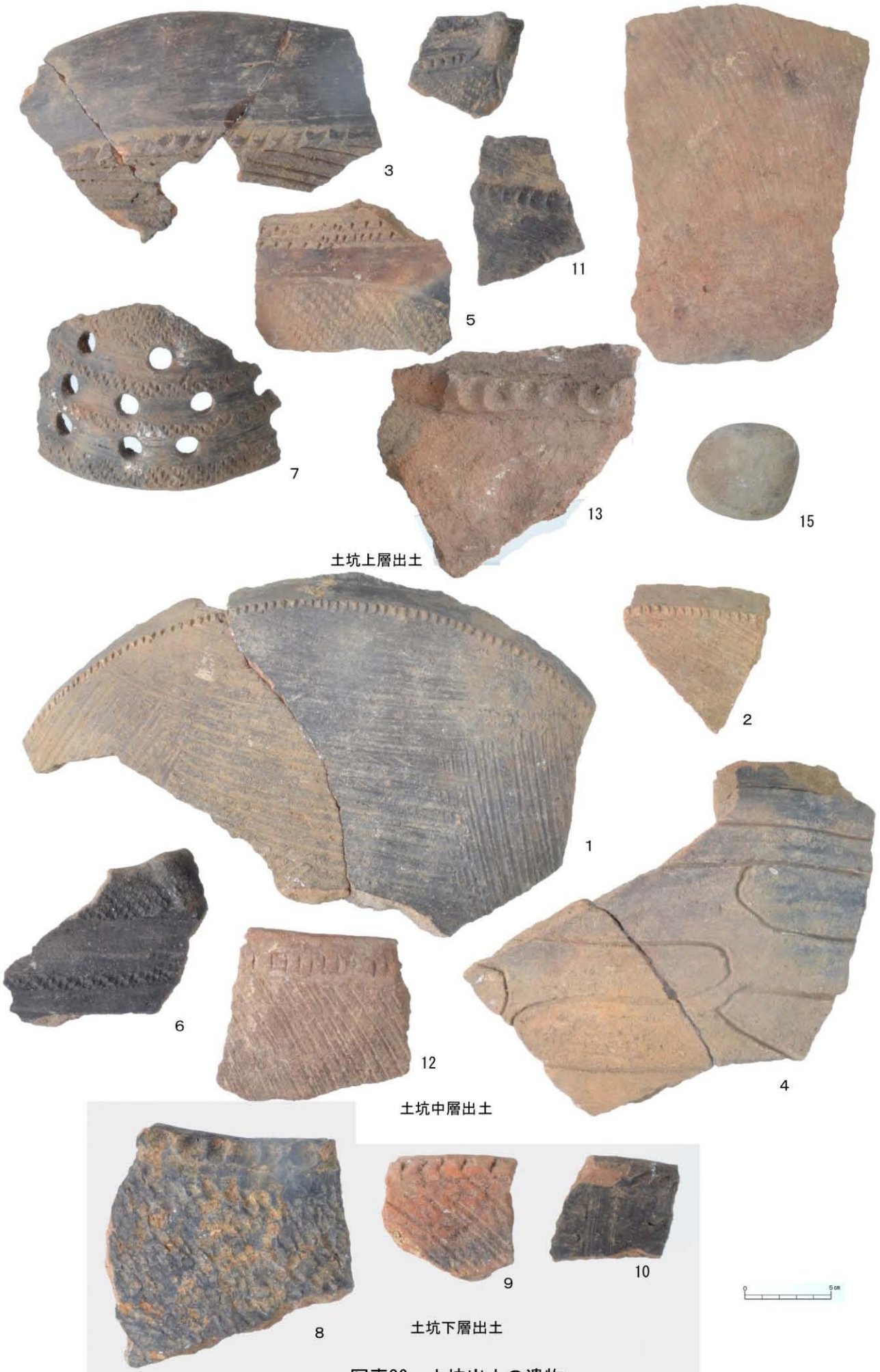


写真20　土坑出土の遺物

（3）出土動物遺体　　小川慶一郎

① 資料と分析方法

貝サンプルは各貝層（上・中・下の3層、貝層の詳細は4-（1）を参照）を一括採取し、その後5㎜メッシュのフルイで水洗作業を行い、自然遺物を含めた遺物の抽出が行われた。

本報告では、動物遺体のうち貝類の同定結果について掲載する。脊椎動物遺体は都合により、概要のみ掲載させていただく。また陸産貝類について、第1表と第4表に種名と点数を記載したが、今回は検討の対象外とした。貝類の同定は千葉県教育振興財団保管の標本をもとに行い、巻貝類は殻軸の下端を保存するもの、二枚貝類は殻長部を保存するものを基準に集計を行った。二枚貝の最小個体数の算出は、左右の多い方を採用した。基礎同定と原稿執筆は小川が行い、陸産貝類と淡水性貝類の同定、同定結果の確認は黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）にお願いした。

第1表　確認された貝類の種名一覧（下は陸産貝類）

綱名	目名	科名	和名	学名
腹足綱	古腹足目	ニシキウズ科	ダンベイキサゴ	*Umbonium (Suchium) giganteum*
	中腹足目	カワニナ科	カワニナ	*Semisulcospira libertina*
		タマガイ科	ツメタガイ	*Glassaulax didyma*
		タニシ科	マルタニシ	*Cipangopaludina chinensis laeta*
	新生腹足目	アクキガイ科	アカニシ	*Rapana venosa*
		アクキガイ科	レイシガイ	*Thais (Reishia) cravigera*
		エゾバイ科	バイ	*Balylonia japonica*
		コロモガイ科	トカシオリイレ	*Habesolatia nodulifera*
二枚貝綱	フネガイ目	フネガイ科	サルボウガイ	*Scapharca kagoshimensis*
		タマキガイ科	ベンケイガイ	*Glycymeris albolineata*
	イシガイ目	イシガイ科	ヨコハマシジラ	*inversiunio yokohamensis*
	マルスダレガイ目	フジノハナガイ科	フジノハナガイ	*Chion dysoni semigranosus*
		マテガイ科	マテガイ	*Solen strictus*
		バカガイ科	シオフキ	*Mactra quadrangularis*
		シジミ科	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*
		マルスダレガイ科	ヌノメアサリ	*Protothaca euglypta*
			チョウセンハマグリ	*Meretrix lamarckii*
			ハマグリ	*Meretrix lusoria*
			コタマガイ	*Gomphina (Macridiscus) melanaegis*

綱名	目名	科名	和名	学名
腹足綱	有肺目	ゴマガイ科	イブキゴマ	*Diplommatina labiosa collarifera*
		キセルガイ科	ヒカリギセル	*Zaptychopsis buschi*
			ヒメギセル	*"Mundiphaedusa" micropeas*
		オカクチキレガイ科	オカチョウジガイ	*Allopeas kyotoense*
		ベッコウマイマイ科	ハリマキビ	*Parakaliella harimensis*
			ヒメベッコウ	*Discoconulus sinapidium*
		オナジマイマイ科	ヒタチマイマイ	*Euhadra brandtii*

第2表　貝類同定結果

種名	上層			中層			下層			合計		
	MNI	NISP		MNI	NISP		MNI	NISP		MNI	NISP	
		L	R		L	R		L	R		L	R
ダンベイキサゴ	120	120		24	24		30	30		174	174	
カワニナ	1	1					1	1		2	2	
ツメタガイ	2	2					1	1		3	3	
マルタニシ	2	2		1	1		1	1		4	4	
アカニシ	1	1		1	1					2	2	
レイシガイ							1	1		1	1	
バイ	3	3		1	1		2	2		6	6	
トカシオリイレ	1	1								1	1	
サルボオガイ	1	1		1		1	1	1		3	2	1
ベンケイガイ	1		1	1	fr					2		
ヨコハマシジラ	41	41	38	4	4	4	5	4	5	50	49	47
フジノハナガイ	353	353	349	111	107	111	6	6	1	470	466	461
マテガイ							1	fr		1		
シオフキ							1		1	1		1
ヤマトシジミ	1	1	1	1		1	2	2	2	4	3	4
ヌノメアサリ	1		1									1
チョウセンハマグリ	183	183	169	143	121	144	114	114	106	440	418	419
ハマグリ	2	2		3	3	2	2	2	2	7	7	4
コタマガイ	2	1	2	2	2	2	3	3	2	7	6	6
合計	715	－	－	293	－	－	171	－	－	1179	－	－

② 分析結果

1　貝類

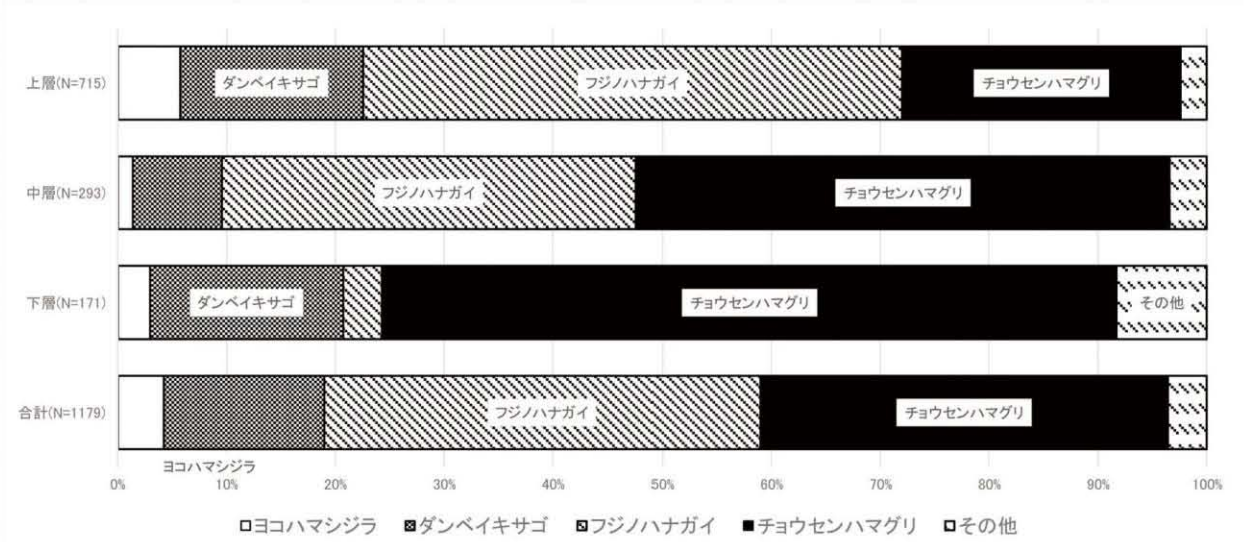
全体で巻貝類（腹足綱）8種、二枚貝類11種を検出した(第1表)。主要種として、ダンベイキサゴ、チョウセンハマグリ、フジノハナガイ、ヨコハマシジラがみられる(第2表、第3表、第1図)。チョウセンハマグリ、ダンベイキサゴ、フジノハナガイは現在も九十九里浜でみられる貝類であり、本報告でとりあげる資料のうち、外洋砂底性種が大半を占めることがわかる。外洋砂底性種以外で主体種としてみられるヨコハマシジラは、淡水性の貝類である。

貝層ごとの貝種組成を比較すると、下層と中層・上層で組成が大きく変化する。中層以外では、フジノハナガイの増加とそれに伴うチョウセンハマグリの減少がみられる。下層から上層まで加曽利B2式期の貝層であり、本報告の貝層ごとの貝種組成の差は、採取の季節性による可能性が高い。

主体種以外の貝類で、特徴的な点を以下に記載する。淡水性貝類として、マルタニシとカワニナがわずかに検出された。各貝層から1点ずつの出土であり、ヨコハマシジラを採取した際の混獲の可能性も考えられる。またツメタガイはすべてホソヤツメタ型であった。

2　脊椎動物

魚類は、1㎜から2㎜メッシュ相当と思われるいずれも小型の資料が中心である。おそらく巻貝類の殻内部に混入していたものと思われる。椎骨を中心にコイ科、ウナギ属、ドジョウ科などの、淡水域から汽水域に生息する種が確認された。哺乳類は9.5㎜メッシュ相当の資料が目立つ。ニホンジカが主体で、他にイノシシ、イヌ科が確認された。また特徴的な資料として、上層と下層から各1点ずつ鯨等類の椎間板が確認された。



第１図　貝種組成

第３表　貝種組成（%）

種名	合計 (N=1179)	下層 (N=171)	中層 (N=293)	上層 (N=715)
ヨコハマシジラ	4.24%	2.92%	1.37%	5.73%
ダンベイキサゴ	14.67%	17.54%	8.19%	16.78%
フジノハナガイ	39.86%	3.51%	37.88%	49.37%
チョウセンハマグリ	37.32%	66.67%	48.81%	25.59%
その他	3.56%	8.19%	3.41%	2.38%
合計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

３　貝製品

中層のチョウセンハマグリの右殻１点の内部に、にぶい赤褐色（2.5YR4/3）の顔料の様なものが付着している様子が確認された(写真２－1)。また、腹縁部全体に摩耗の痕跡がみられた。顕微鏡で観察したところ、使用痕等は確認できなかった。腹縁部の摩耗から機能を推定するのは困難であるが、赤色顔料の付着に関しては、殻を簡易のパレットとして使用していた可能性が推定される。

上層のベンケイガイ右殻のうち、打ち欠いた痕跡がみられる資料が１点確認された。やや風化の痕跡がみられるため断定はできないが、貝輪未成品の可能性がある(写真２－2)。

また製品ではないが、中層出土アカニシの下端部が破損しており、割れ口付近が被熱を受け、一部黒色化していた(写真２－3)。

写真21　同定貝種（１アカニシ、２ダンペイキサゴ、３ツメタガイ、４トカシオリイレ、５バイ、６レイシ、７カワニナ、８マルタニシ、９サルボウガイ、10ヤマトシジミ、11ヨコハマシジラ、12チョウセンハマグリ、13フジノハナガイ）

写真22　貝製品（１チョウセンハマグリ、２ベンケイガイ、３アカニシ）

③考察

山武姥山貝塚の所在する高谷川水系（栗山川の支流）の境遺跡や中台貝塚と比較すると、縄文時代中期では本遺跡でも主体種として確認されたチョウセンハマグリ、ダンペイキサゴといった外洋砂底性種に加え、ワスレイソシジミやヤマトシジミといった内湾性や汽水性の貝類が主体種として確認される。後期前葉の堀之内式期になると、上記の内湾性や汽水性の貝類の出現率は減少し、外洋砂底性種が組成の大半を占めるようになる（大谷ほか2009、小川2020a、金子1980・1987、小宮1987）。

上記の傾向と山武姥山貝塚の貝種組成を比較してみると、外洋砂底性種が組成の大半を占める点では、高谷川水系の後期の遺跡としては調和的である。また、イシガイ科（本遺跡ではヨコハマシジラ）とフジノハナガイが主体種として確認できる点は、本報告における特徴である。イシガイ科とフジノハナガイは、栗山川の縄文遺跡全体で数点確認されるのみである。

外洋砂底性種が主体となる点に関して、中期段階まで漁場として利用していた、潟湖の淡水化が進行したことと関係性があるのではないかと考えられる（小川2020a）栗山川河口付近には潟湖が存在していたことが想定されており（一木2012)、中期にはこうした潟湖でワスレイソシジミやヤマトシジミを採取していた。そして後期以降に淡水化が進行したことにより、汽水、内湾的な環境が縮小、消滅し、汽水性貝類、内湾性貝類の採取から、外洋砂底性貝類のより積極的な利用へ移行したものと思われる。

次にフジノハナガイが主体種として確認される点について着目する。フジノハナガイが貝種組成中で多くみられるのは、南白亀川水系以南の遺跡でみられる傾向である。南白亀川では、栗山川のように大きな潟湖が存在せず、汽水性、内湾性貝類の良好な漁場がなかったことから、中期から外洋砂底性種が卓越する様相を示すものと考えられる。本報告のイシガイ科を除く貝種組成をみると、外洋砂底種の中でもダンペイキサゴ、フジノハナガイ、チョウセンハマグリが主体種としてみられる点で、南白亀川水系の中期から後期の貝塚の貝種組成と良く似ている。加曽利B2式期の山武姥山貝塚の貝類利用が、縄文中期の南白亀川水系の遺跡と似た様相を示す要因として、以下の２つの案が想定される。

１つは南白亀川以南から、フジノハナガイの利用が栗山川流域に伝わったということである。もう１つは水域環境の変化である。前述のように外洋砂底性貝類の卓越は、淡水化が大きく進行したことに起因すると思われる。本報告の貝層が形成された加曽利B2式期には、堀之内式期以上に淡水化が進行し、汽水域、内湾域が縮小、消滅したことに起因するのではないだろうか。

また、貝種組成中でフジノハナガイがここまで多い割合を示すのは、南白亀川水系の僧御堂遺跡のみである（小川2020a)。遺構内貝層がある程度短期間の廃棄を示しており、フジノハナガイを集中的に利用していた時期や季節を反映している可能性が考えられる。フジノハナガイの利用に関しては、出汁としての利用があげられているが（西野2017a、小川2020a)、その詳細は現状不明であり、今後の検討課題としていただく。

最後にヨコハマシジラのまとまった出土に関してだが、九十九里地域全体を通時的にみても、縄文遺跡においてイシガイ科の貝類がこれほどまでにまとまって出土した事例はみられない。九十九里地域において、貝類は外洋砂底性種の利用が中心であるが、魚類利用の傾向として、淡水～汽水性種が主体種としてみられる（小川2020b、金子1987、小宮1987、樋泉2017)。ヨコハマシジラの出土は、これまで魚類獲得のための漁場として設定してした淡水域を、より積極的に利用していった結果と考えられる。また県内においてイシガイ科の食材としての利用が拡大したのは中世以降であると指摘されている（黒住2017、西野2010)。

まとめると、中期まで汽水～海水性の貝類を利用していたが、汽水・内湾性の水域環境が縮小、消滅したことにより、外洋砂底性貝類の採取により積極的なった。同時に、これまで魚類を得るための漁場であった淡水域の利用も活発化した結果、イシガイ科を積極的に採取していたものと思われる。

第４表　陸産貝類同定結果

種名	上層					中層					下層					合計				
	9.52mm	4mm	2mm	1mm	MNI	9.52mm	4mm	2mm	1mm	MNI	9.52mm	4mm	2mm	1mm	MNI	9.52mm	4mm	2mm	1mm	MNI
イブキゴマ			1		1			1		1								2		2
ヒカリギセル	1	6			7		2	5		7						1	8	5		14
ヒメギセル			2		2													2		2
キセルガイ科			7	5	12								1		1			8	5	13
オカチョウジガイ			1															1		1
ハリマキビ			1		1													1		1
ヒメベッコウ			1		1													1		1
ヒタチマイマイ	2				2	1				1						3				3

謝辞（五十音順、敬称略）
執筆にあたり、以下の方々にお世話になった。この場を借りて厚く御礼申し上げる。
上守秀明（千葉県教育振興財団）、黒住耐二（千葉県立中央博物館）、西野雅人（千葉市埋蔵文化財調査センター）、服部智至（千葉県教育振興財団）

動物遺体原稿関係参考文献

大谷弘幸・西野雅人・黒住耐二 2009「芝山町境貝塚補稿」『研究ノート山武 特別号』（財）山武郡市文化財センター
小川慶一郎 2020a「千葉県千葉市中野僧御堂遺跡出土動物遺体の検討」『Archaeo-Clio』17 東京学芸大学考古学研究室　※印刷中
小川慶一郎 2020b「東金市羽戸遺跡出土動物骨の検討」『研究連絡誌』82（公財）千葉県教育振興財団　※印刷中
金子浩昌 1980「第４章Ⅱ．貝層出土の動物遺存体」『千葉県山武郡芝山町　境遺跡発掘調査報告書―第Ⅰ・Ⅱ地点―』芝山はにわ博物館
金子浩昌 1987「E．動物遺存体」『千葉県多古町境遺跡発掘調査報告』多古町遺跡調査会
川戸彰 1951「東上総山武郡地方に存する石器時代遺跡遺物について」『上代文化』20　國學院大學考古學會
黒住耐二 2017「付章　須賀井遺跡から得られた貝類遺体」『柏北部中央地区埋蔵文化財調査報告書７―柏市須賀井遺跡―縄文時代以降編』千葉県教育委員会
小宮孟 1987「５．自然遺物」『主要地方道成田松尾線Ⅴ』（財）千葉県文化財センター
小宮孟 1993「千葉県山武姥山貝塚の上層堆積物から水洗分離した動物遺存体」『研究報告』２-２　千葉県立中央博物館
清水潤三 1954a「九十九里沿岸に於ける低地遺蹟の研究」『史学』27　三田史学会
清水潤三 1958「千葉懸栗山川流域における貝塚の地域的研究」『史学』31　三田史学会
樋泉岳二 2003「下太田貝塚の貝類魚類遺体」『千葉県茂原市 下太田貝塚』総南文化財センター
樋泉岳二 2017「付章第3節魚類・両生類・爬虫類」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32―東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡―』（公財）千葉県教育振興財団
西野雅人 2008「第２章第２節貝類」『境貝塚・山ノ台遺跡・儘田台遺跡・殿部田古墳群』（財）山武郡市文化財センター
西野雅人 2010「貝類」『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　印旛村松虫陣屋跡』（財）千葉県教育振興財団
西野雅人 2012『第４章第1節動植物遺存体」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書16―東金市羽戸遺跡第１地点・第２地点』（公財）千葉県教育振興財団
西野雅人 2017a『付章第1節貝類」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書32―東金市養安寺遺跡・大網白里市養安寺遺跡―』（公財）千葉県教育振興財団
西野雅人 2017b「第４章鉢ヶ谷遺跡(2)の動物遺存体」『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書33―東金市鉢ヶ谷遺跡(1)・(2)、大網白里市若司谷遺跡―』（公財）千葉県教育振興財団
西山太郎 2002『九十九里地域の低地遺跡再考」『財団法人東総文化財センター設立10周年記念論集』
西山太郎 2010『九十九里地域の貝塚」千葉縄文研究会例会資料
一木絵里 2012『日本における縄文海進の海域環境と人間活動』東京大学大学院学位論文
増田富士雄・藤原治・酒井哲也・荒井忠・田村亨・鎌滝孝信 2001「千葉県九十九里平野完新統の発達過程」『第四紀研究』40－3
森脇広 1979「九十九里浜平野の地形発達史」『第四紀研究』18－1

報　告　書　抄　録

ふりがな	さんぶうばやまかいづか
書　　名	山武姥山貝塚
副　書　名	―展示図録―・―平成31年調査報告書―
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	道澤　明、小川　慶一郎
編集機関	横芝光町教育委員会
所　在　地	〒289-1727　千葉県山武郡横芝光町宮川11907-2　ＴＥＬ0479-84-1358
発行年月日	西暦　2020年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
さんぶうばやまかいづか 山武姥山貝塚	ちばけんさんぶぐんよこしばひかりまち 千葉県山武郡横芝光町 とおやまあざだい 遠山字台513-1	12410	Ｙ24	35° 668′ 153″	140° 443′ 852″	20190125 ～ 20190128	12㎡	墓地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山武姥山貝塚	包蔵地 貝塚	縄文	土坑	縄文後期土器 動物遺体	縄文後期加曽利B2期の土坑1基検出

５　まとめ

本書では、これまでに県で調査した資料、及び地元有志が収集した資料、平成31年に調査した成果を収めた。県調査では縄文前期から晩期にいたる貴重な資料が得られ、本遺跡の様相の概要が明らかになった。県調査では報告書が出され、「千葉県の歴史」にも紹介され、とりわけ晩期については多くの研究者によって注目され、検討されて来ている。ここに載せた資料も多くは報告書に掲載されているが、再整理して未だ興味深いものが多くある。しかし、紙数、時間的な制約等によって、分析はまだほとんど進んでいないのが現状である。細かいことはまた機会があれば紹介したい。

山武姥山貝塚は、以上のように縄文前期から晩期末まで営まれた遺跡で、前期から後期にかけては断続的であるが、晩期に急速に発展し、縄文時代が終ると同時にその歴史を閉じた。また、太平洋に面した縄文遺跡の中で、最も大きい貝塚で、鹹水性貝種が多い中で、汽水、淡水性の貝も混じるなど、その特異な存在も明らかとなった。このような中でも、とりわけ晩期の様相については、特徴的な土器が出土したことで、昭和30年代から注目され、姥山式土器が設定されるなど、学史的にも重要な遺跡である。しかし、姥山貝塚は未だに史跡指定されること無く、その保存整備は全く進んでいない。そのなかで近年、遺跡に接して高規格道路が通ることになり、それに関連して墓地移転で遺跡が一部掘削されることになり、緊急の発掘調査も実施した。そのような状況の中で、今後、この重要な遺跡を保存、活用を計るべく、この小誌が参考になることを望む。

山武姥山貝塚
―展示図録―
―平成31年調査報告書―
発行日　令和２年３月３１日
編集・発行　横芝光町教育委員会
印刷　三陽メディア株式会社